

講演会「19世紀後半から20世紀初頭の英国に見る唯美主義の世界—リバティのガウンを中心に—」
講師：菅野ももこ氏（文化学園服飾博物館学芸員）

本稿は、企画展「世紀末デザインの世界—モリスとリバティ、ときどきジャパ—」の関連イベントとして2022年11月5日（土）に行った講演会「19世紀後半から20世紀初頭の英国に見る唯美主義の世界—リバティのガウンを中心に—」をまとめたものである。講師は文化学園服飾博物館学芸員の菅野ももこ氏である。菅野ももこ氏は、2019年度に共立女子大学博物館所蔵の西洋服飾資料の調査、2020年度にレース作品の調査、2021年度に共立女子大学博物館開館5周年記念特別展「ベル・エポックからモダンへ」におけるアンダードレス製作と着製作業にご協力いただいた。なお、今回の講演会では、2019年度に調査いただいた西洋服飾資料の一部についてもご紹介いただいた。上記のように、同氏には継続的に共立女子大学博物館における西洋服飾分野の充実・発展にお力添えいただいている。今後も菅野ももこ氏をはじめとする先生方にご指導・ご鞭撻を賜りながら、共立女子大学博物館における西洋服飾分野の更なる発展に努めていきたい。

（文責 小池奏衣）

只今ご紹介をいただきました文化学園服飾博物館の菅野ももこと申します。本日は、お忙しい中ご参加くださりまして、誠にありがとうございます。操作の都合上、着席での講演とさせていただきます。改めまして、本日このような機会をいただきまして、心より御礼申し上げます。お聞き苦しい点多々あるかと存じますが、最後までどうぞよろしく願いいたします。

本日は「19世紀後半から20世紀初頭の英国に見る唯美主義の世界 —リバティのガウンを中心に—」というテーマでお話をさせていただきます。皆様、既に展覧会会場にて「世紀末デザインの世界 —モリスとリバティ、ときどきジャパン—」展をご覧いただけましたでしょうか。まだご覧いただけていない方もいらっしゃるかと思いますが、ぜひまたの機会に会場にてご覧いただければと思います。本展覧会には、世紀末の英国で試みられたデザインの変革について、非常に象徴的と言える作品の数々が展示されております。本講演では、会場でご覧いただきました19世紀末から20世紀初頭にかけて生み出された作品の数々を享受していただこう、「唯美主義」を支持した人々について、彼らが求めた世界とその装いを中心に、お話をさせていただきます。本講演の内容につきましては、次の通り一章から四章にかけてお話をさせていただきたいと思っております。まず、唯美主義についてお話をする前段階としまして【1. 19世紀後半の英国の女性ファッション】、次に、【2. 英国における唯美主義】、【3. 唯美主義とその装い】、【4. リバティ商会における女性服への試み】の順にお話をさせていただきます。なお、本講演の内容につきましては、その一部をお手元のレジュメに記しております。どうぞそちらと合わせまして、スライドの方をご覧いただけたらと思います。

初めに、19世紀後半の英国の女性ファッションについてご紹介したいと思います。本題であります、唯美主義についてお話をする前段階としまして、同時代の英国の女性の装いについて、お話をいたします。19世紀の英国の女性ファッションは、他のヨーロッパ諸国同様にフランス・パリのオートクチュールを中心としていました。ご覧いただいている画像は、19世紀に発行されていた新聞、イラストレイテッド・ロンドン・ニュースの1870年6月号に掲載されていました「パリの流行」というタイトルの記事のイラスト（図1）です。イラストレイテッド・ロンドン・ニュースには、定期的にこのような記事が掲載されていて、流行の発信地であるパリから最新の情報がもたらされていました。描かれている女性達は皆、非常に華やかな装いに身を包んでいる様子をご覧いただけるかと思います。女性達は、当時流行していましたスカートの後ろ腰にやや膨らみのあるバスル・スタイルに身を包んでいます。そして、頭の前からつま先まで「隠蔽」というとやや大げさではありますが、身体をその装いですっぽりと覆い隠していることが分かります。

こうした装いには、当時の英国ヴィクトリア朝における厳しいモラルが反映されていると考えられます。日中の外出時、女性達はその素肌をさらすことは許されず、そのマナーを守るこそが、家庭を守ることに繋がっていました。これらは、中産階級の家庭の女性に求められたマナーであり、こうした身体を覆い隠し、様々な行動や動作を制限する装いは、「非労働の象徴」と捉えられていました。「動きにくい」装いの女性を家庭に置くこと、それは女性たちの夫であったり、父親であったり、そういった男性の経済力や社会的地位を周囲に示す役割を担っていたと言えます。こうした男性に代わって装いに費用と時間を費やす「富の代行消費」については、20世紀初頭のアメリカの経済・社会学者でありますヴェヴレンが自身の著書である『有閑階級の理論』の中



図1

Paris Fashion The illustrated London news, 1870年6月4日4号より複写

で次のように述べています。「われわれがみにつけている服は常にわれわれの金銭的立場の証明であり見る者すべてに瞬時のうちにそれに関する示唆を与えるという点で衣裳への支出は他のいかなる方法にも勝る利点をもっている」。このように、「装う」ということに対して、私たちが考えている以上に非常に細やかな気配りを必要としたというのが、当時の女性ファッションの特徴の一つと言えます。今お話ししたような大切な役割を果たすため、女性達は衣裳のみならず、それをまとうための身体においても理想を求めることとなります。非労働の象徴には、例えば、なで肩であることや小さな足などが挙げられますが、服装史上で最も注目されるのが、「コルセット」と呼ばれる下着によって形成される細いウエストかと思えます。ここで、細いウエストを求める女性の心理が垣間見られる当時の雑誌に掲載された記事を取り上げてご紹介したいと思います。こちらの画像は、1877年にイギリスの著名な風刺雑誌であります『パンチ』に掲載されたイラストです（図2）。

「ファッション・エミグレイション＝流行における対抗意識」という、タイトルが付けられています。物語の登場人物は、女主人と彼女の衣装を手掛けているドレスメーカーであるプライスさんという女性の2名です。この二人の会話を少し聞いてみたいと思います。まず、女主人から話が始まるのですけれども、この「苦しそうに話している」というところがどうやらポイントのようなのですが、女主人がまず話し始めます。「ウエスト回りはどれくらいかしら？ プライスさん」。そうすると、それに対してドレスメーカーのプライスさんが答えます。「21インチです奥様」。21インチというのは約52センチですけれども、「これ以上細くすると息ができなくなりますよ」。それに対して女主人が再び話し始めます。「ジュマイヤ・ジョーンズ夫人のウエストはどれくらいかしら？」すると、再びドレスメーカーが答えます。「今は19と1/2インチ（49センチ）です奥様。しかしあの方は奥様よりも身長が低く、昨年の秋に病気をされてからひどく痩せています」。それに対して女主人が答えるわけですけれども「では19インチ（48センチ）にして頂戴、プライスさん。入るようにしますから」。この言葉で会話は終わるのですけれども、ここに若干の狂気すら感じられる会話ではございますが、自分の親しい女性より、1cmでも細いウエストを手に入れたい、そういった当時の女性の心理が垣間見られる一つの記事かなと思います。

こうしたファッションにおける対抗意識であるとか細いウエストを求めるといった理想というのは、19世紀後半から世紀末にかけて激しさを増していくこととなります。ご覧いただいている画像は、1883年に出版されました *The Art of Beauty* に掲載されたイラストです（図3）。著者である、イギリスの作家ホーウィスが、美しさ、服装、身体的外観の重要性を一冊にまとめた本書なのですけれども、そこに掲載されたイラストには、コルセットの着用により変形した身体が描かれています。このイラストに添えられた記事をご紹介します。「私たちは身体を守る体にぴったり合った、体形を良くする衣服の必要性を否定しません。コルセットの着用を拒否した人々は皆とてもだらしく見えます。しかし私たちはこのマシーンに対抗しなければなりません。まるで蜂のようで、人の動作の優雅さや、緩やかな動きの魅力を損なう結果をもたらしました」。ということで、ホーウィスは、コルセットの着用を完全に否定しないまでも、その行き過ぎた締め付けについて、警鐘を鳴らしていることがわかります。こうした身体の変形は、



図2
講演資料より転載

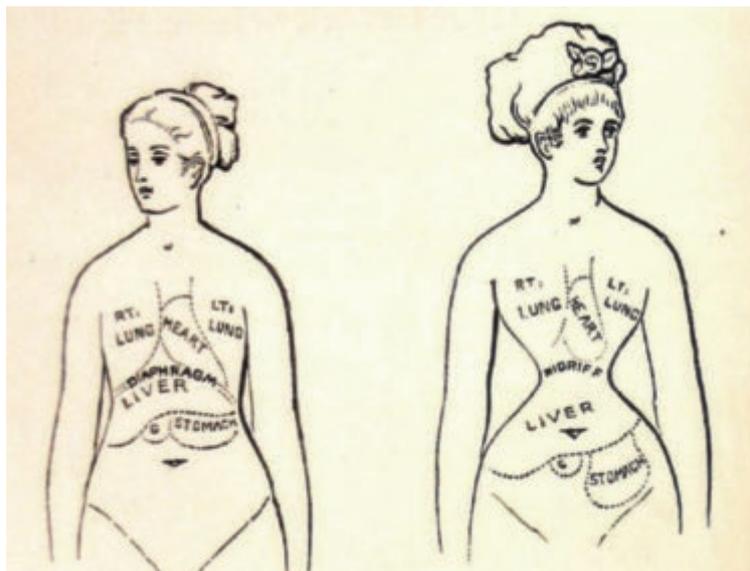


図3
「装いにおける危険性」

Haweis, H. R. Marshr. *The art of beauty*. London, 1883, p.50 より複写

極端な事例と捉えられるかもしれませんが。しかしながら、ホーウィスだけでなく、例えばイギリスの服装史研究家であるカニングトンも、著書である『下着の歴史』の中で「コルセットを着用した17-21インチ（43-53センチ）のウェスト・サイズの女性は決して珍しくはなかった」と記しています。

こうした19世紀後半の女性ファッションについて、様々な方面から問題点の指摘や試みがなされるようになります。具体的にどういった人が何を言ったかといいますと、例えば医師は健康と未来の人口のためと言って、女性達のコルセットの着用を徹底的に否定しないまでも、極端な身体の形成に警鐘を鳴らすようになります。そして、一部ではありますがフェミニストの女性達です。彼女たちは、女性自らの権利の主張のために、通常とは異なる衣装を身にまとって自分の考え方を主張していました。このフェミニストの動きというのは、主に1850年代のアメリカで婦人参政権を求める動きの中で起きた試みでありました。そしてこの度の展覧会のテーマでもあります、世紀末のデザイナーや画家らは、「美しさ」のために、従来の女性ファッションとは異なる装いを提案します。デザイナーや画家といった人々の試みの派生した形が「唯美主義」ではないかなというふうに考えられます。このような解説をしますと、まるで「パリを中心とした女性ファッション」が悪者のように聞こえてしまうかもしれません。医師やフェミニスト、デザイナーらがパリの女性ファッションというものを悪者のように扱っているような構図になってしまっているのですが、確かにそういった「アンチ・パリ・モード」の動きもあったわけですが、ここで考えるべきは、どちらが良いか悪いかということではなく、ファッションを享受する人口が非常に増えた19世紀後半において、多くの矛盾や問題点があったということ、また様々な分野の人々がそのことについて考え、意見を述べるようになったということ。これらが、19世紀後半という時代のファッションの特徴ではないかなと考えられます。

こうした女性ファッションを取り巻く様々な変革の一つに芸術家やデザイナーの試みがありました。そこから派生した主義・思想として19世紀後半以降、英国の唯美主義が高まりを見せるようになります。ここから本日の本題であります、唯美主義について、ご紹介をしたいと思います。はじめに、唯美主義とは何か、その定義をお示ししたいと思います。オックスフォード西洋美術事典によりますと、唯美主義とは、芸術は自足的、自立的、自己的である、という主張に基づく諸傾向であります。芸術は芸術性以外の目的をもつ必要はなく、倫理、政治、宗教などの非芸術的基準によって、その価値を判断されるべきではない、というのがこの傾向の原理であります。「芸術のための芸術」という言葉にその原理の意味も、その原理が端的に現れた作品の性格も、集的に表現されている」とあります。このように「唯美主義」そのものは、英国に限った現象ではなく、美術の分野においては、既に存在していた主義・思想であります。ただ19世紀後半のイギリスにおける唯美主義は非常に極端な傾向であったと言えます。その思想は絵画、建築、工芸等、多岐に及びました。それまで、つまり、19世紀後半まで、伝統的に芸術に求められてきた道徳性や倫理性への拘りに対して、唯美主義は純粋に「美しさ」を追求することをモットーとしました。このことが多くの人々を魅了した要因

の一つといえます。唯美主義については、これまで多くの研究者によってその専門書が出されてきました。また、展覧会でも紹介されています。ここで、その一部をご紹介します。書籍としましては、エリザベス・アスリン、ロビン・スペンサー、それからライオネル・ラウンボーン。彼らが専門的な書籍を出版しています。展覧会に関しましては、2011年にロンドンのビクトリア&アルバート・ミュージアムで *The Cult of Beauty* という展覧会が開催されております。また、日本でも2014年に三菱一号館美術館で「ザ・ビューティフルー英国の唯美主義ー」という展覧会が開催されております。ここで、この主義・思想の運動の特徴を挙げたいと思います。唯美主義の特徴としましては、第一に特定のグループが存在していたわけではないという点が挙げられます。つまり画家や建築家、デザイナーが「私は唯美主義者です」と言ってグループを組んで何かを実施していた、制作していたというわけではないということです。当時、芸術家としましては今現在、展覧会にて作品が展示されておりますウィリアム・モリスであるとか、その他、建築家のノーマンショー、画家のホイットラーという人物が挙げられますが、彼らについては、後世の人々が「唯美主義の芸術家」としてグループ化したに過ぎません。では、誰がこの唯美主義運動といえますか、主義・思想をリードしていたかといいますと、「唯美主義の芸術家」として位置づけられている人々の作品を享受していた「鑑賞者」であります。彼らによって唯美主義というのは、当時リードされていたという実態があります。彼らは、独自の美意識をもち、生活の中にその美しさを取り入れることに熱狂したわけですが、唯美主義を支持する人々が自らの主義に従って美的であるものだけを享受しようとした傾向は、後ほどご紹介します、ラファエル前派の運動の中で発展した倫理性や道徳性を美徳としていた芸術への反動として生まれたものでした。彼らが求めた美意識というのは、日本や中国などの異国趣味、古代や中世への憧れを織り交ぜた折衷様式でありました。ご覧いただいている画像は、先ほど細いウェストを理想としていたスライドでも登場しました、風刺雑誌の『パンチ』に描かれた唯美主義者の生活の様子です（図4）。

左のイラストには、手に団扇を持った女性や帽子に孔雀の羽根が付いているのがご覧いただけますでしょうか。中央のイラストには、背景に中国の陶器が並んでいます。右のイラストには、古代ギリシャ風の女性が描かれた衝立がご覧いただけるかと思えます。唯美主義には、それを象徴するモチーフがいくつかありまして、そちらをご紹介します。まず一つ目が向日葵の花です（図5）。左側の作品はトーマス・ジェッキルによる室内装飾品で、暖炉の前に並べる柵です。1870年代半ばにジェッキルがこの向日葵の形をしたインテリアを制作したことで、その後、向日葵が唯美主義の主要なモチーフとなり、隣の男性の形をしたティーポットにも配されているのがご覧いただけるかと思えます。次が百合の花です（図6）。百合の花はキリスト教において、純潔の象徴とされ、受胎告知などの宗教画にも登場する花として知られています。過去の歴史の中に美の規範を見出していた唯美主義者にとって、この百合の花もまた、非常に重要なモチーフであったと言えます。バーンジョーンズによって描かれた室内履きのための習作であります。こちらは、過去の唯美主義をテーマとした展覧会にも必ずと言っていいほど出展される象徴的な作品です。この靴の裏に百合の花が咲いている様子をご覧いただけるかと思えます。その隣のイラストには、長髪の男性の背後に百合の花が描かれた衝立がご覧いただけるかと思えます。そして、三つ目のアイテムが孔雀の羽根です（図7）。孔雀は異国趣味の象徴的な存在であり、



図4
講演資料より転載



図5
講演資料より転載

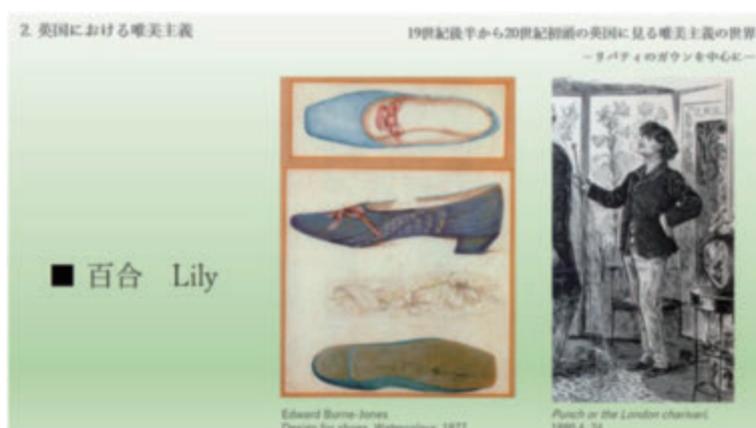


図6
講演資料より転載



図7
講演資料より転載

小説の中の挿絵やテキスタイルにも数多く描かれています。

これまで、向日葵、百合の花、孔雀の羽といったものをご紹介してきたのですが、これらのキーワードにゆかりの深い人物として挙げられるのが19世紀を代表する文豪である、オスカーワイルドです。彼こそ、唯美主義を牽引した人物と言えるかもしれません。「ドリアングレイの肖像」や「ヴィンダミア夫人の扇子」などの作品がありますが、ここで、彼の作品である「幸福の王子」の中に見る、唯美主義的な表現をご紹介したいと思います。「幸福な王子」は、ご存知の方も多し物語かと思えます。主

人公は、とある国のとある街に置かれた黄金に輝く像です。街の人々は親しみを込めてこの像を「幸福な王子」と呼んでいます。この主人公の像は自我がありまして、人間と同じように思考を持っています。街に困った人がいると、自らの体についている金や宝石を友人である賢い燕に運ばせて救済するという心優しい王子なのです。王子の像が黄金で光り輝いている間、街の人々は王子を褒めたたえながらも、そこに「何の役にも立たないけれども」という言葉を添えています。こちらに「王子さまは風見のようにお美しい（中略）ただ風見ほどには役にたたないが」とありますように、ただ、王子は美しいだけなのだということを強調しています。物語の終盤になりますと、全ての金、宝石を分け与えてしまった王子の像は大変みすぼらしい姿になってしまいます。見るに堪えないという理由から、撤去されてしまうのですけれども、街の人々には、貧しい人を救済したという心の清らかさは届かず、あくまでも「美しいか否か」によって判断されている唯美主義的思想の極端な様子がこの小説から見て取れます。このように、時に極端な表現が見える唯美主義ですが、その最も注目すべき点は、純粋に美しさを追求することをモットーとしたことです。このことが、様々な階級を超えて、多くの人々を魅了したということではないかと思えます。ロビン・スペンサーの著書の中には、そのことがわかる一文がこのように記されています。「1880年代半ばの最盛期には、イギリスの皇太子から中流階級にいたるいくつかの社会階層の人々がそれを享受した。裕福で、“啓発”される事を好み、何らかの芸術的集まりに接している人たちなら、ノーマンショー設計の家に住み、ウィリアム・モリスにオリジナルの家具を注文し、ホイッスラーの絵を買うといったぐあいだったのである。もしそれに手が届かなければ、リバティの織物や日本の屏風やひとかかえの孔雀の羽でもいいわけで、ずっと簡単に手に入った。このように唯美主義運動でもいろいろなレベルの「美意識」があった」。

このように唯美主義が様々な階級を超えて、人々の暮らしに浸透していった様子がお分かりになるかと思えます。唯美主義を支持する人々が、異国情緒あふれる趣味で室内を飾ったことはこれまでにご紹介してきました。それに加えて、彼らは、自らの装いにも拘りを見せたわけですが、その一端をここでご紹介したいと思います。先ほど、唯美主義というものが、ラファエル前派の運動の芸術への反動として生まれたというお話をしました。ここで改めてそのことについて触れたいと思います。ラファエル前派 (Pre-Raphaelite Brotherhood) とは、ロセッティやミレイといった、当時まだロイヤルアカデミーの若い画学生であった彼らを中心に1848年に設立された芸術家グループであります。この時点で、まったくグループ化されていなかった唯美主義とは全く別の形態であるということがわかるかと思うのですけれども、そのグループ名が示す通り、ルネサンス以前の時代に絵画の主題や美の規範を見出していました。彼らが描いた絵画、それはまさに倫理性や道徳性を美徳とした芸術でありました。今、皆さんにご覧いただいている作品は、ダンテ・ガブリエル・ロセッティによって1874年に描かれた「プロセルピナ」です (図8)。「プロセルピナ」は、ギリシャ・ローマ神話に登場する冥界 (死後の世界) の王妃、そして春や農耕の女神です。人目を避けて小さな島で生活をしていましたが、ある日冥界の王に誘拐されてしまいます。そこで、誘拐されている最中ではあったわけですが、お腹が空いてしまって、冥界の石榴の実を食べてしまいます。冥界の植物を食べてしまうと、そのまま死後の世界に留まることを



図8

Dante Gabriel Rossetti, Proserpine, 1874

強要されるというルールがあるのですけれども、彼女の両親が「地上に返してくれないか」と交渉を始めます。その結果、妥協案として、一年のうち半分を冥界で、半分を地上で過ごすことになりました。彼女が地上に降りてくる季節が春、すなわち農耕の季節であることから、彼女は春の女神としても知られています。この絵画が言わんとすることは、なぜこの世界に「季節」があるのかということ、これは、そのことを教える絵画です。つまり、1点の絵画を鑑賞するために、様々なことを考えなければならない、事前を知っておかなければならないことが多いのです。簡単に言いますと、小難しいというところがあります。

こういったものに対する反動といたしまして、純粹に美だけを追求する唯美主義が広まりを見せたというように考えられます。加えて、ラファエル前派は、自然を忠実に描く事をモットーとしていました。実際に忠実に描くために、テーマに合わせて作り、モデルに着装させて制作を行っていました。こうしてモデルに着せられたドレスというのは、芸術的ドレス、アーティスティックドレスと呼ばれて、画家の周囲にいた女性達、限られた人々の間で着用されておりました。

唯美主義は反動で生まれた思想であったとお話をしました。反動ではあったのですが、ラファエル前派の装いにおける美意識は受け継がれることになります。ここで少し話が脇道に逸れますが、この度の講演中、または唯美主義について学ぶ際に欠かすことのできない資料として、当時の風刺雑誌であります、『パンチ』が挙げられます。「風刺」と聞きますと、事実を誇張させて、おもしろおかしく表現したもの、と捉えられがちです。確かにそうした一面もあるかと思いますが、ここで今一度、この貴重な資料である『パンチ』と風刺について考えたいと思います。まず『パンチ』というタイトルですけれども、正式名は *Punch or the London Charivari* であります。

これは、1870年に刊行された『パンチ』の表紙絵なのですけれども、この馬にまたがっているキャラクターの名前が、パンチであります(図9)。このパンチというのは、イタリアのコメディア・デラルテ(風刺喜劇)に登場しますキャラクターのひとりなのですが、背中に大きなこぶがありまして、驚のような鼻をした暴れん坊です。つまり、決して美しいと言えるような容姿ではないのですが、どこか愛嬌のあるキャラクターなのです。そして *Charivari* というのは、ヨーロッパの古くからの風習で、新婚夫婦の家の周りを夜、お鍋などを持ってその底を叩きながら囃し立てるといふものがあります。つまり、*Punch or the London Charivari* は、この乱暴者のパンチ氏が、当時の王室であるとか政治を、風刺を通じてユーモアを交えながら批判するものであったということが、このタイトルから見て取れるかと思えます。

そして、『パンチ誌』が創刊当初から掲げているモットーに「すべての人に納得のゆく、奥の深い笑いを作り出す諷刺雑誌」といふものがあります。これは「風刺」そのものの性質とも深く関わりのある表現だと思ふのですが、つまり、描く人と、それを鑑賞する人が同じ感覚を共有できていて初めて成立する「奥の深い笑い」であると言えます。ヒューモアに溢れ、時に誇張が過ぎる部分もあるかもしれませんが、そこには、その時代に生きた人々が感じ取ることができた真実が描かれているものと考えます。よって、この度の講演でも多数のイラストをお借りして、お話を進めていきたいと思ふます。それでは、今ご説明しましたパンチに掲載されている唯美主義者の装いを見てみたいと思ふます。ご覧いただいているイラストは、1880年2月14日に掲載されたイラストです(図10)。「ばかもの、とんま、あんぼたん」というタイトルがつけられています。赤い○で囲んだ3人の女性に注目した



図9
講演資料より転載

いと思います。

まず、向かって右側の女性のドレスの袖にご注目ください。こちらの袖の形式というのは、15～16世紀に流行した「スラッシュ」という技法を思わせる袖の装飾です。スラッシュというのは服を割いて、その裂け目から下着であると内側に着ている服の生地を覗かせる技法なのですけれども、それを思わせる袖が描かれています。続いて中央の女性ですけれども、肩山から袖口にかけて大きく膨らんだ袖、それから非常に細いスカートが描かれています。服装史上であまり見かけたことのない「いつの時代の服なのだろう」と思わせる服なのですが、どこか歴史的な雰囲気を感じさせる女性服が描かれています。次に、一番左側の女性ですけれども、古代ギリシャを思わせる月桂樹の冠が頭につけられておりまして、全身にプリーツが施されたような表現が描かれています。このように、いつの時代とも、どこの国とも分からないような虚構の世界に浸るとというのが、当時の唯美主義者の趣味でありました。

中央のイラストの女性を取り上げて、同時代の一般的な装いと比べてみます。左の2枚が19世紀後半の一般的な装いです。バスル・スタイルのドレスのとなりのコルセットと、所謂バスルという下着が付けられた女性の形なのですけれども、こちらと見比べてご覧いただけたらと思います。

今ご説明しました通り、当時はウェストを細く締めるためのコルセットであるとか、後ろ腰に膨らみを持たせるためのバスルと呼ばれる腰当てなど、様々なアイテムを女性たちは身体に着けていたわけですが、中央の唯美主義の女性の方に今一度ちょっと目を向けてください。唯美主義を支持する人々の装いには、そういった要素が見られません。ディテールについては先ほど申し上げたように、古代であるとか中世を感じさせるものがあるのですけれども、そのシルエット自体に注目しますと、これはむしろ19世紀初頭に流行した「エンパイア・スタイル」に近いのです。画面の一番右にあります19世紀初頭の白いドレスですが、こちらはハイウェストの切り替えです(図11)。コルセットは着用していた事実もあるのですけれども、19世紀半ば程の細い「くびれ」というものが一切見られません。このように19世紀初頭のシルエットをベースにコルセットを取り払い、さまざまな時代の装飾を部分的に取り入れて組み合わせた擬似歴史風な装いというのが『パンチ誌』に多数描かれています。

ここまで19世紀の女性ファッションを取り巻く様々な出来事との中で芽生えた唯美主義という思想とその特徴についてお話をさせていただきました。ここから、唯美主義の芸術家として位置づけられた人々や、その鑑賞者であった人々の牙城として知られていたリバティ商会における女性服の試みについてご紹介させていただきます。

今日ではロンドンの主要な観光地となっているリバティ商会なのですけれども、こちらは1875年にリージェントストリートにオープンいたしました。創設者であるリバティは芸術や文化に対して強い関心を持っていて、多くの芸術家やデザイナーとの交流の中で得た知識や彼らからの要望というのを経営に反映させていました。リバティ商会はオープン当初から単に商品を販売する百貨店としての枠を超え、時にギャラリーとしての役割も果たし、消費者の趣味の向上に寄与していました。扱っている商品は、主に中国や日本をはじめとする東洋の美術品でした。そして、先ほどご紹介した通り唯美主義者として位置付けられる芸術家やデザイナーとしての牙城としても知られていました。



図10
講演資料より転載

1884年には建築家でありますゴドウィンを指導者として、リバティ商会に女性服部門が設立されます。ゴドウィンは1886年には亡くなりますので、わずかな間ではあったのですけれども、女性服部門で監督を務め、コルセットを着用しない歴史上の衣服を原型とした芸術的で健康的なドレスの制作とその普及に努めていました。

リバティ商会に女性服部門を設立することについては、内部からの反発も大きくあったと言われています。なぜそういったことが起こったかと言いますと、まずリバティ商会というのは「大衆の趣味の向上」というのをモットーに掲げていたわけです。女性服というのは常にパリからの影響を受けて、流行に左右されやすいものという考えがありました。そのため、そういったものを扱うことに対して不安を感じる社員も多かったようです。しかしながら、そういった社内の心配をよそに、リバティ商会から販売されたパリのオートクチュールのスタイルとは異なる、コルセットを着用しない形態のドレスというのは、次第に唯美主義を支持する人々に限らず、広く大衆に好まれるようになっていきます。ちなみに女性服部門が設立される前年の1883年になりますと、「唯美主義ドレス」という言葉が生まれます。この言葉が生まれた経緯についてお話します。1883年、舞台衣装のデザイナーであり、グロブナーギャラリーを経営していました副支配人のカミンズ・カー夫人が、ポテト蒸し器を使って白のモスリンを蒸して縮らせた布地でドレスを制作したという記録が残っています。さらに、このドレスに感銘を受けた19世紀を代表する女優でありますエレン・テリーが、自分にも同じものを作ってほしいというふうにオーダーしまして、このころから唯美主義ドレス (Aesthetic dress) というキーワードが広く知られるようになったと言われています。このようなことや、1884年に開設された女性服部門の活動によって、リバティ商会の唯美主義ドレスというのは非常に広まりを見せたというふうと考えられます。

それでは、ここからリバティ商会から販売されたドレスをご覧くださいと思います。まず初めにご紹介するのは島根県立石見美術館に収蔵されています20世紀初頭のティー・ガウンであります。全体的なシルエットとしましては14～15世紀の中世を思わせるシルエットですが襟元には中国の清朝を思わせる芥子縫い (フレンチナッツ) の技法による刺繍のアププリケがあしらわれています。またこちらのドレスは二重の袖になっているのですけれども、そのオーバースリーブの先端にはタッセルが取り付けられています。このように一着のドレスの中にさまざまな要素が混在している、所謂「折衷様式」であることも特徴的なドレスであるかなと感じます。ちなみにこのタッセルについて少し注目したいのですけれども、このタッセルというのは、この後ご覧いただきますリバティ商会が販売したドレスやコートにかなりの確率で登場する装飾です。その起源についてお話したいと思います。タッセルは、エジプトやメソポタミアなどで古代の時代から存在していた装飾です。ただ当初は悪霊や悪魔から子どもの身を守るための所謂お守りであったとされています。このタッセルがヨーロッパにもたらされ成立するのは14世紀ごろとされています。衣類に限らず室内装飾全般に用いられる房飾りとして広く普及されました。このタッセルというのは異国主義を連想させやすい装飾であったと考えられます。また、単に装飾としての機能だけでなく、部分的に、例えば先端に取り付けることで、そのドレスのシルエットを安定させるといった重石としての役割も兼ね備えていたと考えられます。次に、時代は前後するのですけれども、こちらは19世紀後半にリバティ商会のものとして紹介されているドレスです。こちらはラベルが付いてリバティ商会で制作された



図11
講演資料より転載

もの、ということではなくて、購入者が生地を購入して自分で作るパターンでした。そういったリバティ商会のドレスというのも存在しています。生地を購入した画家であるとか建築家が、自身の妻のためにドレスを制作するということがあったようなのですが、こちらの2点はまさにその実例であります。いずれも部分的にスモッグと呼ばれる技法が取り入れられています。この技法は、ウエストや襟まわり、それから袖の部分に取り入れられています。こういったコルセット着用せず、部分的にスモッキングを行うことで非常に緩やかに身体に生地がフィットするという効果があると思います。また、スモッグ刺繍には想像上の田舎であるとか牧歌的な雰囲気を感じさせる、そういった効果もあったと言えます。

そしてここから、共立女子大学博物館に所蔵されていますリバティ商会の衣装の数々をご紹介しますと思います。今ご覧いただいているのはバーヌース・スタイルのケープ3点でございます。バーヌースというのは、ブルヌスとも呼びますがけれども、丈の長い頭巾付きのマントであります。元々、素材としてはウールが使用されていました。フードの先端にタッセルが付いていることがご覧いただけるかと思えます。このバーヌースですけれども、ヨーロッパにおいては、1830年代以降、女性用の外套として流行しました。ご覧いただいています画像は、東京家政大学博物館で所蔵されています1850年代のバーヌースであります。頭巾とその先端にタッセルが付いているのがご覧いただけるかと思えます。なお、ヨーロッパにおけるバーヌースのフードというのはイミテーションといいますが、あくまでも装飾であります。本場の北アフリカのバーヌースというのは昼夜の寒暖差から身を守るために保温効果のあるフードが必需品であったわけですが、ヨーロッパではあくまでも異国風の羽織物として着用されておりまして、フードは飾り物として付けられていたに過ぎません。今一度、共立女子大学博物館のケープに戻り、その形をご覧いただきたいと思えます(図12)。形態としましては、図解をするまでもないというくらいにシンプルな半円形をしています。形態としましては非常にシンプルなのですが、上質なシルクサテンをたっぷり使ったケープであるということがわかります。矢印の方向に地の目が通っておりまして、幅1メートル30以上の生地をたっぷり使ったケープであるということがわかります。

この形態に関しましては他の2点についても同様です。ネックポイントにタッセルが付いています。3点とも形態は同じなのですが、色ですとか施されている刺繍、前開き部分の留め具などはそれぞれ異なります。3点ともリバティのLondon & Parisのラベルが付いています。リバティ・デパートは1890年にパリにも支店を出すことになるのですが、これらのケープというのは1890年以降のものというふうに考えられます。こちらはニューヨークのメトロポリタン美術館に所蔵されております同じ形のケープです。先ほど、このように共立女子大学博物館所蔵のケープというのは正面から撮影をしているのですが、ちょっと横を向かせるとこのようにタッセル部分をキモノの衿を抜くように後ろをくっと引っ張りますと小さなフードが付くような、そういった形になります。また、一番右端の写真では、少し腕を上げただけで現れる、ゆったりとしたドレープがご覧いただけるかと思えます。つまり、このシルクサテンというのがいかに上質な生地であるかということが、ここでお分かりになると思えます。次に、日本の道行を思わせるコートなのですが、左側のコートには大胆な乱菊の模様が使われています。コートは、一見すると異なる生地が使われているかのように見えるかと思うのですが、目を凝らしてご覧いただきますとどちらも地紋は同じもの、ということで共に乱菊の模様をご覧いただけます(図13)。右側のコートには、乱菊の地紋いかにもリバティらしいというような

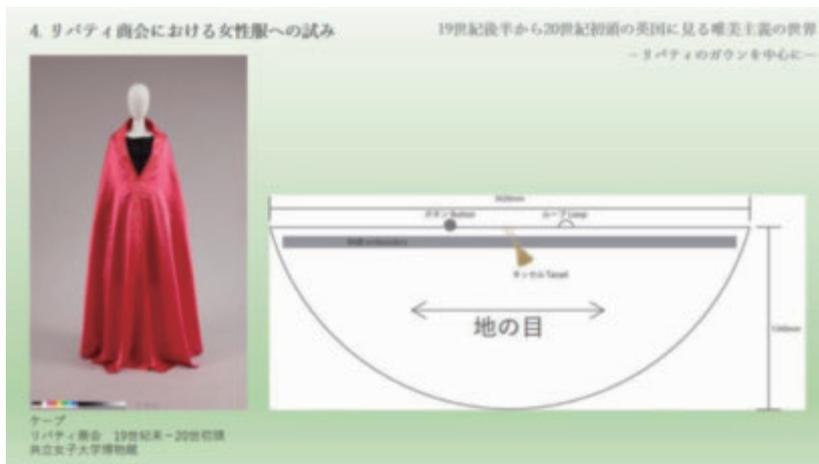


図12
講演資料より転載



図13
講演資料より転載

柔らかな色彩でプリントがされています。ちなみに同じ生地で色違いというようなコートが製作されているのですがこちらは京都服飾文化研究財団で所蔵されている同じテキスタイルが使用されたコートであります。このように、異なるデザインが使われていたという点を見ますと、非常に人気の高い生地だったのかなというふうに考えられます。

ここまでリバティ商会から販売されていた実物の衣装というのをご覧いただいたのですが、最後にこういった女性服を生み出したリバティ商会の創始者であるアーサー・リバティが女性服に一体どういった思いがあったと言えますか、どういったことを考えてこういった取り組みをしていたのか、ということをご自身の言葉で見ていきたいという風に思います。ご覧いただいている画像は19世紀末にロンドンで設立されました「健康的・美的服装同盟」(Healthy and Artistic Dress Union) というものがあるのですが、そこから出されていまして機関誌である『アグラリア』の1894年の最終号です。ここに、リバティが論文を寄稿しています。「装いにおける趣味の進化について」そういったタイトルの論文です。その中で彼が述べていることというのを少しここで紹介したいと思います。まずひとつが、大衆の趣味の向上への配慮です。読み上げますと、「達成された成功を考慮して、これほど大きな恩恵は必ずしも裕福な階級だけに与えられるのではなく、社会全体が適度な費用で美しい織物を確保できるようになることを望んでいる」。そして次に、イギリスの試みが諸外国に与えた影響についても言及しています。「服装の趣味の進歩は西洋の進歩と呼ばれてきたが、これを厳密に定義すると、イギリスはこの運動の積極的な普及をしたに過ぎません。この改良は、米国、カナダ、ドイツ、フランスに有益な影響を与えました」。この後、女性服への新しい試みというのはヨーロッパ大陸の方へ移動しまして活発化することになるわけなのですが、イギリスの試みがその根底にあったということをご示しています。

最後にまとめに入りたいと思います。唯美主義を享受した人々が道徳性や倫理性を求めることなく、純粋に美を追究したということ、また彼らの牙城であったリバティ商会の創始者が広く大衆に目を向けていたということ。このことがより多くの人々が様々なレベルで唯美主義的な意識を生活の中に取り入れることとなった。というふうに考えられます。また、後の他のヨーロッパ諸国の女性服への取り組みに影響を与えることとなったという非常に重要な主義・思想であったのではないかなというふうに考えております。それでは、長くなりましたが以上で私の講演を終わらせていただきます。

スライド中でお借りしました画像の出典先をこちらに記しております。ご協力いただきました館に深く感謝申し上げます。それでは長時間にわたりご清聴ありがとうございました。

Karaori with a design of basketry and peony branches on alternating blocks of orange-red and light blue

Kawai Yukako

[Abstract]

In the collection of the Kyōritsu Women's University Museum, the "Karaori with a design of basketry and peony branches on alternating blocks of orange-red and light blue" is part of a collection of items that also includes tags and tatō-gami (folded decorative paper) with sumi-ink markings indicating a connection to the Date clan. It also includes a cloth sack that was used by Noh performer Ryōtarō Ōnishi, who is believed to have been the former owner of the Karaori. An investigation was conducted into the pedigree and provenance of the Karaori based on the information obtained from these accessory items. The results did not corroborate the idea that the Karaori was a Noh costume handed down by the Date clan. It was found, however, that a Noh costume held by the Date clan left their possession in the late Edo period, as many of the items held by former daimyō left their possession in the early modern period, and subsequently changed hands several times within Japan. Specifically, it is thought that after leaving the possession of the Date clan, it came into the possession of Ryōtarō Ōnishi via an antiques dealer and was used in Noh performances and for the purposes of research into Noh costumes.

Lecture: The World of Aesthetic Movement in England from the Late 19th to the Early 20th Century: Focusing on Gowns of Liberty

Kanae Koike

[Abstract]

This paper is based on the lecture "The World of Aesthetic Movement in England from the Late 19th to the Early 20th Century: Focusing on Gowns of Liberty" held on November 5, 2022 as a related event of the exhibition "The World of Fin-de-siècle Design: Morris, Liberty, and Sometimes Japan." The speaker was Ms. Momoko Kanno, curator of the Bunka Gakuen Costume Museum. She cooperated in the research of Western costume owned by the Kyoritsu Women's University Museum in fiscal 2019, the research of the lace works in fiscal 2020, and the production and dressing of underdresses in the special exhibition "From Belle Époque to Modern" commemorating the 5th anniversary of the Kyoritsu Women's University Museum in fiscal 2021. In this lecture, she also introduced some of the Western costume she surveyed in fiscal 2019. As mentioned above, she has continuously contributed to the enrichment and development of the Western costume field at the Kyoritsu Women's University Museum. We here by express our sincere gratitude to Ms. Kanno, various professors and curators for the continued guidance and support.